

〔特集〕歴史的環境整備のあり方

## 九州・山口の西洋館と保存

白石直典\*

### 1 はじめに

昭和40年代以降の高度成長期において、日本の都市構造は大きな変化をみたが、その過程で明治開化以来、生きのびてきた多くの西洋館があえなく消滅していった。それは近代化が要求する機能性の面で不利なことと、老朽化等による理由からであった。犬山市内に各地の西洋館を集めて明治村が開設されたのは昭和40年であった。この頃から日本建築学会は全国各地に残っている西洋館の調査を開始し、その結果を「新版日本近代建築総覧」技報堂（1983）としてまとめた（近代建築とは18世紀頃から現代までの洋風建築とされるべきであろうが、通常は幕末以降、昭和敗戦までの洋風建築を近代建築とする例が多い。一方、ポスト・モダンの建築が賑やかになり始めて30年は経過するが、それらが直線的、機能的かつ機械主義的所産であるのに対して、明治・大正建築は装飾性豊かで芸術性を重視した建物であるため、これらを様式建築とも称している。本稿では幕末から昭和敗戦までの西洋館を近代建築として扱い、それ以後について述べる）。一方、女性を中心とした市民による西洋館の保存運動もこの頃から活発化した。こうして各地で取り壊しか保存かのきわどい場面をくぐり抜けた建物が幸いに

も保存と決まると、今度は一転して国の重要文化財（以下重文）に指定されるという例が増え始めた。以前、中国地方の某県で、市民からの西洋館の保存の陳情に対して「日本建築に比べたらまだ百年そこそこのから文化財への指定は難しい」という説明がなされたことがあった。このような発言となった背景には、西洋館に対する認識の有無もさることながら、これはこの国の文化に対する政治の貧困という伝統的背景に基づいているのであった。そうはいわれながらも、最近、九州・山口地方でもぼつぼつ国の重文指定がみられるようになってきたのは喜ばしい。ここで近代建築が生まれた足跡を辿り、何故、今、西洋館なのか、そして、中央の流れの中で九州・山口地方ではこの間どのような事情にあったのかを眺めてみたい。

### 2 西洋建築の導入

#### 2.1 建築材料

幕末、米英等から開国を強要された（1858・安政5年）日本は一挙に殖産興業へと邁進することになる。幕府はオランダの技術者の指導を得て長崎に造船所を造った（1861・文久元年）が同時に建築材として必要なレンガの焼成も始めなければならなかった。この時が

\*（財）九州環境管理協会理事

国産最初の洋風建築用レンガの本格的生産であろうとされている（奈良時代の寺院建築の特に基壇に、粘土を焼いた中国式の灰黒色レンガ「<sup>せん</sup>塙」が使われたという記録はある）。幕末に来日したウォートルス（イギリス）もレンガの焼成を指導し、新橋から銀座までをレンガ街としている。筆者は以前、呉市内で取材中次のようなエピソード<sup>2)</sup>を知った。呉市にある海上自衛隊呉地方総監部で元呉鎮守府庁舎の2代目の建物（初代は明治22年であるがこの1部も含んで明治40年改造…現在のは3代目）は戦前から英國製レンガで造られたものと伝承されていたが、昭和57年解体時の調査によって、呉市郊外三津村で造られた国産のレンガであることが判明し大きな話題となった。これまでの長い間の伝承は海軍がつくりあげた神話であったというのだ。同様に江田島の元海軍兵学校の赤レンガ建築（1893・明治26年）も1枚1枚のレンガを銀紙に包んで英国から運んだものといわれているが、これも多分、三津村製のレンガではないかとみられている。長崎市にある元英國領事館（現在長崎市野口彌太郎記念美術館、明治40年、国重文）の赤レンガはすべて上海から運んだとされているが…。福岡県大刀洗町にある鉄川与助の名作今村カトリック教会（明治45年）の赤レンガは佐賀県千代田町迎島製。遠路はあるばる信者達が大八車で運んだといわれている。このように明治開化後の建築材はレンガで始まり、そして明治40年頃にはレンガの生産体制も急速に整っていったものとみられる。

レンガと同時に石材も早くから使用されていた。幕府が横須賀に造船所を建設（1865・慶応元年）するため、フランスからヴェルニーを招いたが、彼は日本で初めて西洋式の燈

台も造った。これはその後英國人プラントンが引き継いだ。彼は北九州市の部埼燈台（明治5年）、伊王島（長崎）、佐多岬（鹿児島）、角島（山口）等のほか、日本で28基の燈台を建設した。九州で石造建築がよく残っているのは鹿児島市内である。島津斉彬は反射炉、製鉄、硝子、陶磁器製造等の大コンビナートを造った（1858・安政5年）が、当時の機械工場として残っているのが現在の尚古集成館。これはわが国最古の洋風建築（石造平屋棧瓦葺）（1865・慶応元年）で国指定重文。このほか、現在の鹿児島県立博物館考古資料館（明

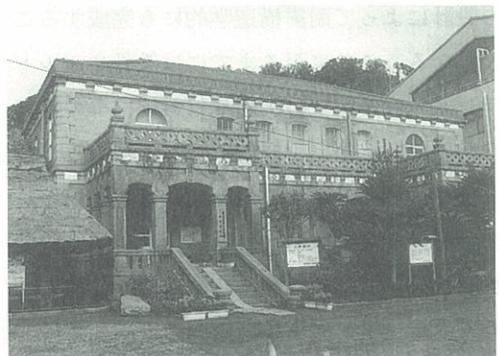


写真1：鹿児島県立博物館考古資料館

治16年）（写真1）は完成度の高い建物である。また、市内南林寺町一帯に立ち並ぶ凝灰岩で造られた倉庫群は独特の景観を見せる。世知原町歴史民俗資料館（長崎県）（明治末）は、山間にあって炭鉱で栄えた昔をしのばせる石造建築である。

次に日本古来の土蔵建築にもふれる必要がある。レンガや石の建築は明治24年の濃尾地震で地震に弱いことがわかった。これに対して耐火構造として土蔵造りが高く評価されることになり、特に銀行建築には全国的にこの構造（内部は洋風化）が採用された。西日本地方特に山陰側には現在でもまだかなり現役の銀行として使われているのがみられるが、

九州地方には少ない。傷みはひどいが熊本市内に元肥後銀行で現在熊本食糧会館（明治41年）がある。北九州市には安田銀行若松支店があったが、これは現在明治村に保存されている。しかしこれらの土蔵建築は歴史的にはほどなく衰退していった。

鉄骨構造や鉄筋コンクリートが実用化され始めたのは明治30年代半ばである。これは明治開化後建築界における第2回目の革命と位置付けられている。横河民輔の三井銀行本店（明治35年）における先駆的な鉄骨構造建築は、やがて佐野利器の日本橋丸善（明治42年）の設計によって耐震構造学的にも完成することになる。ここに至るまでには鉄骨やポルトランド・セメントの生産や材料規格等の整備も必要であった。小野田セメントによるポルトランド・セメントの生産開始は明治14年、また官営八幡製鉄所による鉄骨構造生産開始が明治34年であったが、明治末になってようやく生産工学と建築技術両面の進歩と習得とが新しい時代の幕開けを可能としたのである。なお、新日本製鉄八幡製鉄所本事務所（写真



写真2：元新日本製鉄八幡製鉄所本事務所

2）は赤レンガでなく、グレーの鉱滓レンガ造りで、関東大震災の前年（以後はレンガ造り建築は制限）に造られた大規模建築であったが、平成3年頃惜しくも取り壊された。また、小野田セメント四代目社長笠井真三はイ

ギリスからセメント・ブロックの型枠を持ち帰り、これを用いて当時民間大会社で流行した自社の俱楽部を小野田市内に造った（大正3年）。武骨な材料として型破りの容姿を今でもみせるがなかなか立派なものである。

## 2.2 建築技術の教育に当たった外国人

西欧の建築技術の本格的な導入開始は、幕府がオランダの技術者の指導によって竣工（1861・文久元年）した長崎造船所からである。次いでヴェルニー（フランス）によって1865年、横須賀にも造船所が造られた。ヴェルニーと共に来日したバスチャン（フランス）は明治5年、官営富岡製紙所（群馬県）を造ったが、この工場は現在も現役で使われていることでも有名。島津藩の集成館（安政5年）はウォートルス（イギリス）であろうとされている。大阪の造幣寮は明治4年に竣工した大建築であり、ウォートルスによる。ブリジエンス（アメリカ）は築地ホテル（慶応4年）、新橋と横浜の両駅舎（明治4年）その他を建てた。また、明治2年に設けられた北海道開拓使ではアメリカ人技術者や教育者が多く活躍し、当時の建造物も札幌市内にあるホライー（クラークの弟子）の設計による時計台を始めとして各地に多く現存している。この他、工部大学校の前身の工学寮で教育もやったボアンビルはフランス人。工部美術学校の教師であったカペレッチ（イタリア）は、ルネサンスの様式建築の美しさを始めて日本人に見せてくれた（明治14年）。ダイアック（イギリス）は明治3年、新橋横浜間鉄道敷設の起工式で、起点を示すゼロマイルを打ち込んだが、これはJR汐留駅に残っている。また江田島の海軍兵学校生徒館（明治26年）も有名。彼

は日本人からダイガクさんと呼ばれて親しまれたらしいが、明治33年、72歳で没し横浜外国人墓地に眠っている。明治10年、工部省の工部大学校（後の東京大学工学部建築学科）が開校、この初代教授として招かれたのがイギリス人コンドル（当時25歳）である。大正9年、東京で没するまで、建築教育を始め日本舞踊の師匠を妻とし、日本文化全般に亘って海外へ紹介した最大の貢献者である。一方、政府はドイツからエンデとベックマンを招き、またこれによって日本人建築家をドイツに留学させる等、ドイツ流の技術の影響も大なるものをみた。山口県豊北町の歴史民俗資料館（大正13年）はドイツ人の設計したものとしてこの地方では珍しい。九州地方では長崎を中心とした教会関係の設計にフランス人が多い。設計フューレ、工事監督プチジャンは大浦天主堂（1864・元治元年）（国宝、洋風建築で国宝は珍しい）を、セネンツはマリア園（明治31年）と海星学園修道院（明治30年）（平成元年に解体、改築）を、また、パピノーは中町天主堂（明治29年）を残している。その他、長崎市内東山手と南山手には国の重文を含む洋風建築が多く残っている。地方性でもう一つ特徴のあるものとして琵琶湖周辺にヴォーリズ（アメリカ）による多くのミッション関係の学校教会100棟以上があった。このように民間においても北海道から鹿児島まで全国各地で多くの外国人技術者が日本の近代化に貢献してくれたのである。

### 2.3 日本人建築技術者の成長

日本の建築技術を本格的に教育した最大の貢献者は明治10年、工部大学校造家学科の初代教授として着任した英国人コンドルである。

彼によって辰野金吾（唐津市出身）、片山東熊（萩市出身）、曾禰達蔵（唐津市出身）、佐立七次郎の日本人建築家4名が明治12年、史上初めて世に出たのである。同校から明治18年までに計20名が卒業し、またパリに留学（明治9年）した山口半六、アメリカに留学（明治15年）した妻木頼黄も含み、これらの人人が明治の建築界を先導することになる。特にコンドルの一番弟子辰野金吾は明治建築界の最大の実力者として君臨し作品も200件に及んだ。九州に現存する彼の作品としては、西日本工業俱楽部（北九州市）（国重文）、元百三十銀行八幡支店（北九州市）（市重文）、福岡市歴史資料館（福岡市）（国重文）、大分銀行レンガ館（大分市）がある。曾禰達蔵には唐津市歴史民俗資料館（唐津市）（県重文）、占勝閣（長崎市）、明治屋福岡支店（福岡市にあったが平成4年に取り壊された）、明治屋門司支店（北九州市）、鹿児島県庁舎本館（鹿児島市）等がある。維新時、長州の鉄砲隊員であった片山東熊は、赤坂離宮を始めとする宮廷建築で名声を博したが、山口・九州地方には作品は見られない。山口半六は学校建築を主とし、熊本大学資料館・同別館（熊本市）（国重文）、明治の家（荒尾市）を見る。妻木頼黄は官庁営繕関係を主としたが、九州地区では旧門司税關（北九州市）がある。

帝国大学以外でも明治末になって名古屋工業大学から明治41年に、東京工業大学からは明治43年に、また私学の早稲田大学から大正2年に建築学生がそれぞれ世に出るようになる。現在、日本の大学から年間約1万人の建築学生が卒業していることを思うと隔世の感がある。

## 2.4 建築様式の変遷

外国人技術者を雇って始まった工部省・工部大学校卒業生を主導とした比較的規模の大きな公的建築を本流とすれば、一方ではそれ等の様式や意匠を見よう見まねで取り入れた民間大工等の世界があった。これらの建築の特徴は、伝統的和風様式をどこかに残しながらも、新しい西洋の意匠を取り込んだ興味深い建築であり、いわゆる擬洋風建築と称されるものである。現在各地に残されている西洋



写真3：日野医院（湯布院町）

館の中で、この擬洋風建築がとりわけ親しみを感じさせてくれるのである。それ等の建築が明治も早い時期に東京から遠く離れた片田舎ではやばやと建てられているのであり、情報に乏しかった当時の事情を思うと驚きである。一例として、金沢市内にある尾山神社の神門（明治8年）は目に一丁字もなかった大工津田吉之助の設計によるもので、日本古来の神社に西洋風のとりまぜは筆者が見た中では最高に面白くかつ、美事な出来栄えである。このような擬洋風建築を造った地方の大工棟梁達が近代建築史に潤いを与えた役割は貴重なものがある。九州・山口地方を見渡しても例えば佐賀県有田の町並みにみられる6棟の西洋館（明治9年～）、大分県湯布院町の日野医院（明治29年）（写真3）、福岡県穂波町の

ダイヤ機械中野倶楽部（大正10年）、熊本市の長崎次郎書店（大正13年）、岩国市の岩国学校校舎（明治3年）、山口市の河村写真館（明治初～中）、柳井市の佐川醤油店（明治初年）、殿居郵便局（山口県豊田町）（大正13年）等はほんの一例で見る人を楽しませてくれる建物ばかりである。なお、長崎県の特に五島を中心としている鉄川与助の設計による多数の教会堂建築群も特筆すべき遺構である。

さて、このような明治開化以来の洋風建築のグラフィズムに対して、日本建築界では明治30年代後半に鉄筋コンクリート構造と鉄骨構造という極めて工学的な技術の実用化に直面することになる。この新技術に対して欧米では単調な鉄筋コンクリートの壁面は建築芸術として処理できるかということが最大の問題となったようだが、日本では鉄筋とコンクリートの付着性や錆び等に関する技術上の問題と耐火耐震性への期待であったといわれている。そのうち早稲田大学の第2回卒業（大正3年）中村鎮（福岡県出身）は建築芸術論を発表した（大正元年）。一方、東大建築学科を卒業（大正4年）した野田俊彦は卒論で建築非芸術論を発表した。これが有名な“俊=鎮論争”と呼ばれるものになったが、この二つの考え方方が大正から昭和へと続くことになる（なおイタリアやフランスでは建築学科は日本のように工学部ではなく芸術学部に属している）。このように完成された明治以来の古典様式の蓄積の一方では、20世紀初頭にかけて新しい技術や表現方法が模索され始めたのである。

武田吾一、野口孫市はヨーロッパ留学から帰ると、ヨーロッパの世纪末のデザインであるアール・ヌーヴォーやセセッションのデザ

インを設計した。その他、石本喜久治、山田守やその他もヨーロッパの表現主義を取り入れることを唱え始めた。しかし結局のところ彼等の最大関心事は「…様式建築の重圧に加えて、技術優先が生んだ建築非芸術論という難問を克服することにあった…」<sup>3)</sup>。この間、佐藤武夫(大正13年早稲田卒)、渡辺仁らは様式建築の単純化を、村野藤吾(大正7年早稲田卒)(唐津市出身)は意匠の近代化を、吉田鉄郎や山田守らは一連の逓信省建築で日本の独自性の上に北欧表現主義を表した。いずれも過去の蓄積の上にたった建築美の再生と近代化とであった。なお、この人達の九州・山口地方に残る作品として佐藤武夫の岩国微古館(岩国市)(昭和20年3月)は昭和戦前の掉尾を飾るふさわしい建物となり、村野藤吾の宇部市渡辺翁記念会館(昭和12年)(写真4)はドイツ表現派様式をとる昭和期戦前の代表

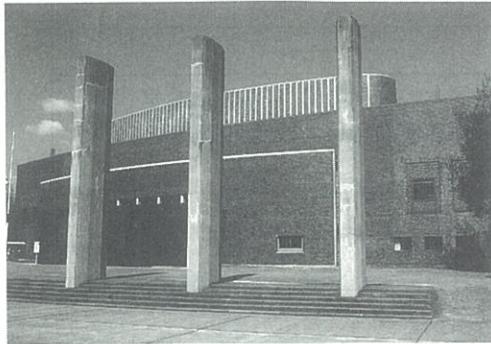


写真4：宇部市渡辺翁記念会館

的建築として出現した。吉田鉄郎は別府市役所西庁舎(昭和3年)と別府市中央公会堂(昭和3年)を残し、山田守には門司電報電話局(昭和12年)がある。また、阿蘇山麓にある京都大学火山研究所(京大技術課設計、昭和3年竣工)はドイツ表現派の代表作メンデルゾーン(1887-1953)のアインシュタイン塔をイメージしたと思えるユニークな建築である。



写真5：元佐賀県議事堂

なお、萩原馨の佐賀県議事堂(昭和12年)(写真5)はアール・デコの美しい建物であったが、昭和63年惜しくも取り壊され、また、石本喜久治の福岡アメリカン・センター(昭和11年)も平成4年に取り壊されたが、この様な伝統的意匠と近代的合理主義を基にした新しい表現の展開は戦後へと引き継がれていくのである。以上が明治以来昭和敗戦までの日本の近代建築の極めて大まかな流れ(実際はもっと複雑であるが)である。

明治以来の近代建築は年数にして80年そこそこの間に生まれたものであるが、そのペクトルは1000年やそれ以上の歳月であった。この間わが国の建築界は日本伝統の木の文化にとって代わる鉄骨、コンクリート文明に否応なく対面することになった。ドイツ表現派のブルーノ・タウト(1880-1938)は、当時日本人でもほとんど知らなかった桂離宮を絶賛したが、彼をここに案内したのは近代的合理主義者の吉田鉄郎であったという。吉田が設計した大阪中央郵便局(昭和14年)や村野の宇部市渡辺翁記念会館などは過去の伝統の上にたった美しい単純化と近代化との戦前までの総決算ではあるまい。

このように現在残っている近代建築は、この間の日本の歴史を物語る遺産として貴重な

ものであり、これらを後世に継承していくべきことには異論をまたないのである。

### 3 西洋館とまちづくりの現状

九州・山口地方で現存する西洋館は250棟前後ではないかと筆者は推定している。この中で国・県などの文化財指定状況は表1のようである。

表1 九州・山口地方に現存する西洋館の文化財指定状況

国指定(国宝→国、重文→重と略記)	県・市・指定
福岡県 門司港駅(重), 西日本工業俱楽部(重), 門鉄会館(重), 旧福岡県教育庁舎(重), 福岡市歴史資料館(重)	旧百三十銀行八幡支店(北九州市), 豊津高校思永館(県)
佐賀県 有田町重伝建地区内の6棟(重)	唐津市歴史民俗資料館(県), 異人館(県)
長崎県 大浦天主堂(国), 旧リンガー邸(重), 旧オルト邸(重), 長崎市野口彌太郎記念美術館(重), 長崎市歴史民俗資料館(重)	口之津民俗資料館(県), 世知原民俗資料館(県)
大分県	日野医院(県)
熊本県 旧第五高等中学校本館と化学実験室(重)	ジェーンズ邸(県)
鹿児島県 異人館(重), 尚古集成館(重)	――
山口県 旧山口県庁舎と旧山口県議会議事堂(重)	岩国学校校舎(県), 萩学校教員室(県), 殿居郵便局(県), 豊北町歴史民俗資料館(県)

この他にも実は現在の所有者の都合によって指定されていない重文クラスの建物も多い。心配されていたキャラハン邸(中津市)も日本文理大(大分市)に移築された。大分市内にある府内会館は持ち主の大分銀行がレンガホールとして市民に開放。別府市役所西庁舎は市民からの公募によってレンガホールと改名された。数年前、公共の色彩を考える会(委員長:小池岩太郎・東京芸大名誉教授)が、公共の色彩賞を選出した結果、爽色の代表は「赤レンガ色」に決まったという。これは明治以来の赤レンガが日本人の色に定着したと

いうことを示すものである(ところで、まちは最近赤レンガ・タイル建築が氾濫しているが、気にいった色の赤レンガにはなかなか出会わない)。次に、三角市内の龍驤館と九州海技学院を軸とした町並み整備、北九州市門司港駅一帯のレトロ・ゾーンの整備、重伝建地区に指定された有田町の町並み、鹿児島市磯一帯の西洋館の整備、旧福岡県教育庁舎を核とした中洲の町並み整備、旧県庁舎と新県庁舎を並存させて見事な庁舎景観を出現させた山口県、また、長崎市の元英國領事館が、最近野口彌太郎記念美術館になったことは、

西洋館の保存方法に一つの先鞭をつけたものと評価したい。このように西洋館を利用した感性ある町並みが創出され始めたことは真に喜ばしい。最近、各県の文化財担当の関係者から、西洋館の台帳作りの必要性を聞くようになつたが、このような傾向にはほんの数年前のことと思うと隔世の感を覚える。

#### 参考文献

- 1) 村松貞次郎、山口廣、山本学治編：近代建築史概説、彰国社
- 2) 呉レンガ建造物研究会編：街のいろはレンガ色
- 3) 山口廣：ドイツ表現派の建築、井上書院

○ 文中の写真はすべて筆者撮影

#### 著者略歴

Shiraishi Naosuke

1928年生 宇部工専卒 工学博士

著書：日本分析化学史（東京化学同人）共著

九州・山口の西洋館（西日本新聞社）

中国地方の西洋館（中国新聞社）

福岡県文化百選建物編（西日本新聞社）

共著

九州・山口・沖縄一庭園の美一（西日本新聞社）

委員：日本標準試料委員会委員 工業技術院

日本工業標準調査会臨時委員 通産省



旧山口県議会議事堂（国重文）：設計・武田五一、大熊喜郎（大正5年）